

囲炉裏



東京から引き上げて来るのに際して、家を建て直した。古い家は当時の名人といわれた人が建てたもので、釘を使わず木組みのみで襖など寸分の狂いもなかった。しかし長い間無人の状態であった上、何回もの台風で屋根が痛み、雨漏りがひどく、修理には新築同様の費用が掛かりそうであった。何よりも家自体から立ちのぼる気配が何とも陰気で、継ぎ接ぎだらけの家よりも、思い切って自分たちの住みやすさを基本にした家を新築することにしたのだった。

夫は案外縁起を担ぐ。家相に関する本を読みあさり、そちらの方角には何を作ってはいけない、こちらの方角は塞がなければならぬなどと、結構うるさい。基本的な設計は私が担当していて、何回もの

試行錯誤の後、それらの細々した条件全てを満足するような線が何とか引けた。

「茶の間には、囲炉裏が欲しいなあ」

またまた新たな注文である。

「作るのはいいけど、煙はどうするの」

ともかく位置だけ決めておいて後は大工さんと相談である。

まだ任期の残っている夫を東京に残して、一足先に鹿児島に戻っていた私は、未完の家の完成までを観察したり、注文をつけたりの日々であった。

働き盛りの気よい棟梁はこちらの様々な難題を手際よく解決してくれた。茶の間に畳半畳の炉を切り、天井は高々と梁の上に張って、囲炉裏の真上に換気扇を取り付けた。その下の梁に太い青竹を渡し、焼きを入れた格子の木組みを吊り下げた。そこから自在鉤を下げるのである。

自在鉤は棟梁と一緒に隣の宮之城まで探しに行つて、竹細工の職人の家に行き、主人から値段も手頃なものを手に入れた。竹の根の微妙な曲線をストッパーに利用した自在鉤は、信州育ちの私には大変

珍しい。

深い炉の七分目ほどまで砂を入れたが、これが問題であった。わが家には、東京から連れて来た二匹の拾い猫がいて、それがアツと云う間にトイレにしまつのである。東京では、家の中に猫用トイレを置つてそれにさせていたので、一軒屋になつても外でする習慣がなかつたかないでいた。火を入れればそんなことはしないだろうが、まだ夏の終わりであつた。当分はめ込みの畳で蓋をしておく他はない。

年の暮れになつて、任地から夫も戻つて、火を入れることになつた。お酒でお浄めのと、先ず木の枝を燃やしてみた。ところが、もつもつたる煙が立ちのぼり、家中の天井を這つて行く。換気扇の能力をはるかに越えた量の煙が発生していた。

結局、火を焚くことを諦めて炭火にすることにした。よく乾燥した薪でないことには、新築の家も煤だらけになつてしまふ。

大晦日も夕方になつて、福岡から妹夫妻が末娘と新築祝いを兼ねてやつて来た。

「お魚屋さんで、鹿児島の家には囲炉裏があるっていたら、これを炙るのが最高だつていうことだね。」

特大のブリの入つた保冷容器と一緒に持ち込んだ包みを開けると、丸々したかわはぎの一夜乾しが現れた。ブリはお風呂場に持ち込んでおいて、亭主族はたちまち囲炉裏端での一杯が始まる。ということとで、三晩連チャンの、干物やすめるめの香ばしい匂いを振りまいての酒盛りとなつた。

ブリは妹がさばいた。私が東京で仕入れて来た新品の木屋の出刃包丁を欠いてしまつたほどの大奮闘で、雑煮や刺し身となつて胃袋に納まつた上、なお切り身のいく切れかを冷凍したほどの大きなものであつた。

六月末、社長として勤めた第二の職場も定年となり、株主総会が終わつて夫が戻つて来た。長い夏の間は捗らなかつた夫の荷物の整理もあらかた終わり、火の恋しい季節になつた。今年はいよいよ本格的に囲炉裏の出番である。

帰郷後、夫は棟梁とその友人を相手に月一回のゴ

ルフを楽しんで、その後はわが家での一杯と云うのが定番となっている。十一月には、囲炉裏に火を入れての一杯にしようと云うことになった。棟梁はその日のために前の川で獲った鮎を冷凍してあるという。

十一月のある日、夫の高校時代の友人達がわが家に一泊してから、翌朝ゴルフに行くことになった。出水からの友人が、大阪からの夫婦を待ち合わせて乗せて来た。

今秋初めての炭火を起こして、囲炉裏に入れた。

何もない田舎だが、火がなによりの御馳走と思つた。大阪の友人とは、私も学生時代に夫と共に何回か会つていた。演劇部に所属して、なかなかハンサムだった。四十年前も前のことである。今もその面影は残してはいるものの髪は薄く、遠くを見ていた澄んだ眼はもう戻らないと思つた。自分も多分同じ思いで見られていたことだろう。

遠来の友の饒舌いろり辺に

紅顔のおもかげ重ねつつ聞く

一二日後、棟梁たちとのゴルフがあつた。私は句会

の例会と重なって、急いで帰つたのだったが、もう夫は家にいた。ゴルフ仲間の皆は三十分後に来ると云う。私は取り合えず、鍋物の用意に取りかかった。夫もカスに炭を載せた。気ばかりせくが、頭ほどには手足が動かない。

玄関が賑やかになつて、早速囲炉裏に集まつているようである。顔を出すと太い竹串に刺した鮎が五徳の回りに林立している。その間には、手の平ほどの椎茸を割いて串刺したものも立つていて、棟梁の心尽くしに胸が熱くなる。

「旨い、旨い」

と夫の声が台所にも聞えて、楽しそうな笑い声がかかる。私も仲間入りして、熱い鮎の背にかぶりついた。本当に囲炉裏は幸せ気分を満喫させてくれる。この炉端に、いつも笑い声が絶えず、賑わっていることをしみじみと願うのである。

(平成7年十二月)